

針葉樹會報

復刊第41号 1974年12月



目

次

四 阿 山	望月 達夫	1
秋の奥鬼怒にて	久保孝一郎	2
嘉門次小屋の秋	柿原 謙一	5
ロツキーでの休日（後編）	石 弘光	6
「エース」時代の想い出	中島 寛	9
会務報告	西牟田伸一	12
翁樹会報告	小林 茂雄	13
山岳部冬山合宿計画	前神 直樹	14

表 紙 写 真

甲斐駒から鋸岳第一高点

（金子晴彦氏撮影）

＊＊

いささか季節はずれの写真（五月撮影）で、
編集係は怠慢のカドで仕末書を出すべきところ。
香港の金子さんからは、クリスマス・カ
ードが届いて、カトマンズ、ボカラに行くか
ら表紙の写真はまかせろとの由。

四 阿 山

望 月 達 夫

ドアを開けることとなつた。

シーズン中の菅平は都会のスキーヤーが蝋集するだろうし、夏季休暇中はラグビー やサッカーの合宿地となると聞いていたので、そんな時は近寄るべきでないと思つていたが、去る十月中旬四阿山へ登ろうと、秋雨のシト

シト降る土曜日の午後おそらく、土田からのバスを菅平で降りた。真田から奥の渓谷沿いは、紅葉が美しい盛りだったので、お天気がよくないせいか意外に人が少ない。バス停から戻つて果物屋でブドウを買いながら、どこか適当な民宿でもないかと訊くと、丁度いま冬のシーズンをひかえて、どこも休業している所が多い、すぐ前の国際ロッジはどうかと教えてくれる。だいたいゴルフ場でもホテルでも「国際」と冠したものに、そういうのはないのが通り相場だが、雨降りの黄昏ときては、こちらの選り好みもままならず、「国際」の

ドアを開けることとなつた。

ところが四十がらみの夫婦者は極めて親切な上に、泊り客は私と相棒のKさんだけなので、二人では食べきれないほどの寄せ鍋を用意してくれ、翌朝は要らないというムスピマで作ってくれた。最近はスキーロッジなどに泊る機会も少ないので、セントラルヒーティングで室内は適温なばかりでなく、トイレまで温くしてあるので、随分ゼイタクなものだと感心した。

翌日は午前中霧が深く、根子岳の石祠で休息していたころはまだ眺望もあまりなかつたが、四阿山との鞍部へでる頃から幸い霧があがりはじめた。その辺にはコケモモやガンコウランの実が目につき、ことにクロマメノキの群落が黒紫の熟れた実をいっぱいつけていたので、つまんでは口に入れた。

四阿山の登りは黒木の樹林帯でなかなか気分がいい。あの懐しい針葉樹の香りが漂つてゐる。そこを登りきるともう灌木帯と草原だ。空はすっかり秋晴れとなつて、浅間山から鹿沢の奥の籠の登、湯の丸、鳥帽子などが手にとるようである。頂上は思ったより狭く二つの小祠があり、数人の登山者に出会つただけ。眼下には田代湖の青い色が紅葉に彩られた山肌にはえて美しい。西空には湧きたつ雲の上に木曾駒山脈と北アルプスがチラと見えた。二三三二・九メートルの三角点は一番高い所から少し先きにあつて、踏跡をつたつて行つてみたが、特に行く必要も感じられない。十二分に山頂の憩いを楽しみ、的岩から鳥居峠へでるつもりで、よく踏まれた路を周囲の景色に見とれながら、すたこら下つてくると、ここは昔の登拝路でもあろうか、所々に古い石の祠が置かれてあつた。どこかで鳥居峠への分岐を見落したとみえ、大分西へはずれいることに気づいたのは、かなり下つてからだつた。どうせ何処かへ出られるだろうと、なおも足をはこんでいると、前方の雲の切れ目から槍の穂や乗鞍が姿を現わして二人の足をとめる。やがて牧柵があらわれ、路は牧場のなかへ誘いこまれた。もう放牧の牛馬の姿はなかつたが、マツムシ草の残りの花や黄ばんだ白樺の葉に、秋の山の下りを愉しん

だ。

街道に出たところは渋沢の集落のはずれで、一軒の農家があり、そのお内儀さんが採りたてのナメコを大笊にいっぱい入れて現われた。早速三〇〇グラム二一〇円で領けてもら

う。四阿高原入口のバス停は、そこから数分上ったところで、薄暗くなつた路傍で残つた食糧をたいらげながら最終バスを待つた。

われわれの乗つたバスが鳥居峠を越える頃は、西空の茜色が実に綺麗だつたが、間もなく夕闇があたりをとざした。バスは新鹿沢を経由して万座鹿沢口が終点。そこでガラガラの鈍行に乗つたのだが、万座鹿沢口が何といふ地名なのか解らぬので、駅前でうどんを食べたとき訊いてみたら、店の主が嬬恋村三原だと教えてくれた。

菅平から根子岳、四阿山のあたりは、中秋のころが案外すいているのかも知れない。

(一九七四年十二月記)

久保孝一郎

秋の奥鬼怒にて

鬼怒川最奥の日光沢温泉宿の建物を横に過ごして腕時計をみると丁度午後三時だ。この分だと登り正味二時間としても、秋の陽のおちぬうちに鬼怒沼ほとりの避難小舎には暗くならぬうちに着けるだろう。何はともあれ、急ぐべしと心にきめて歩を速めた。

そこから路は鬼怒川源流の細まつた流れをわたる。ここで沼の水が飲用不適か、または小屋周辺の水場を暗いなかで探すかを恐れて、男が一人下ってきた。翌日通る鬼怒沼・尾瀬と聞いて安心する。

路は少しの間本流に沿つてから、地図の通りに森林帯の中の急な直登気味となつた。小一時間登ると格好の休み場があり、対岸支流のオロオソロシ沢の三段ぐらいの滝が眺めら

れて、そのはるか上に根名草山が立派に望まれる。この山は昨年の今頃（九月）山崎君と曾遊の地であるだけに懐しい想いがした。ここで一休みしてから、さらに先を急いだ。路は依然としてよく踏まれた直登路である。十分ほどして左に太い倒木があり、正面に日光沢—鬼怒沼の標識が、これまであつたそれと同様式で、立ててある。ここから樹林帯の中の切り開きの感じでさらに直登し、生々しい靴のふみあとがあり、疑わずにそれについて行つた。日没前に避難小舎に入ることが至上命令であり、現在僕らは地図上の直登路にあるということで頭が一杯であつた。五分ぐらい登ると路は二股にわかれていたが、いずれも直登気味があるので、よく踏まれている方を歩いた。先程の標識を見ているだけに、路を誤つたという感じは未だなかつた。しかししあそこから何だか路が新しくつけられたようだとの感じはあつた。

路は時々緩かになつたり急になつたりで藪も下草も大したことはない。処々にごみや弁当がらが落ちているので、人が入つてゐるこ

とは間違いない。しかし十五分ぐらい登ると太い倒木や若木の枝にはばまれて踏み跡はうすれ、路を迷ったという感じがはつきりした。

この山行に僕はおいらく山岳会の〇さんを誘つた。彼は僕より五・六才年長だが、山の経験年数は僕より浅いので、僕がリーダー格で先頭を歩いていたが、彼もそれまで疑わずについてきたわけだ。

このコースは二年前の夏、逆に尾瀬からやろうと思ったが、病み上りの単独行では自信がないので次期を待つことにした。そして今回は初日鬼怒沼避難小舎泊り、翌日は長蔵小舎経由強行帰京（〇さんの日程都合上）の予定で、自炊道具・寝具はもちろん、ツェルトまで用意したので、不時露営も辞さぬつもりでいた。

そのような次第で、途中に露営むきの平地がないため、五時をタイム・リミットとしてさらに原生林の中を登つていき、その頃に平地をみつけてツェルトを張つた。

もし僕ひとりだけだったら、小心の僕は装備があつても、さつき横目で見やつた温泉宿

まで戻っていたろう。しかし〇さんと一緒にいる。心強いし、それにこのツェルトは以前買ったまま未使用なので使い初めも心楽しいことで残念には思われるが、また原生林の中の一夜も悪くなかったと、必ずしも負け惜しみではある。

その夜は幸に木洩れた月光がツェルトを明るくする程の天気で、森林帯の中だから風にもあおられず、印象深い一夜を過した。

翌朝は曇天で〇さんの日程がないため、と

もかく降ることにした。登りに一時間かけ、下りもそのくらいかける積りで慎重に降つた。急な下りを木の枝に妨げられながら降るとやっと登山道に出た。

どうも出た所が迷つた地点の上部らしい。時間が早いので、ともかく沼まで行こうと、荷を路端に置き、から身で登ると、それから路は緩かに左に巻きながら上つている。

登り始めてから三十分弱で沼に出た。その頃はもう、早朝の薄日もかげつて湿原の上にはガスが去来している。立派な木道が湿原を

一回り、池塘を左右に見ながら、通じている。湿原の奥右手には昨夜泊る予定の避難小舎があり、次の機会にそなえて検分しておいた。

昨日は二人とも時間切れにならぬよう、は

もし昨夜ここに着いていたら、湿原と池塘を照らす妖しい月光の景を楽しめただろうと残念には思われるが、また原生林の中の一夜もなくそう言いきれる。夜中に聞えた樹上を渡る風の音と狐の遠吠え、これら以外は全く寝静まつた原生林の一夜はまことに印象深かつた。

さて今回は鬼怒沼まで諦め、登山道を一度下りもそのくらいかける積りで慎重に降つた。路日光沢まで降ることにして行くと、さきほど出会つた所より五分たらず下ると、昨日間違つた個所に出た。ここでもう一度下から登つてくる姿勢でその個所に立つと、正しい路は倒木を踏みこえて左に棧道の巻き路となつている。そしてその場所からみて正面に前記の指導標があるのだが、倒木が太いため、まさかそれを越えるとは（倒木に足がかりでもきさんでおかない）正面に指導標があるだけに気づかなかつた。ただしその場所に立て落着いて左右を見回せば、左側のその倒木のさきに前記棧道が望まれるのである。

やりにはやつて猪突猛進したため直登してしまつた。そして前記のように、そこには生々しい靴跡もあつたのである。

途中で炊事をしたりして、昼すぎ一浴すべく日光沢温泉場に入り、この話をしたら、宿の人も、あそこは間違いやすいので指導標をつけたら、以来迷う人は少くなりましたとのことである。しかしその指導標の左方向の矢印がうすれていたのが僕らの敗因の一つであつて、かえつて指導標のない方が僕らはあそこで左右をよく見回しただろうと思う。あそこは岩にペンキで矢印を明記すべきだと思うが如何にせん後の祭りである。

この妄想には、僕が抑ウツ病の頃、「人にだまされた、馬鹿にされた」という被害妄想のかたちで、しつこく僕の頭の中にデンと居坐っていた。心が健康である時は、たまたま被害妄想になつても、これは正しい由来のものであるかどうかよく吟味して、確たる

根拠のないものであれば、仮りに「人がだまし、馬鹿にしても」、自分の確固たる信念にもとづいて、これを超越し、勇往邁進わがよしとする道を歩もうとする強い気概が湧き出てくるはずである。それに反して、気が衰えてくるが病むと、この妄想のとりこになってしまい、それからの脱出がますます困難となる。

以上この秋九月下旬に試みた奥鬼怒探訪の記事ですが、前回につづきこれを種に僕は精神衛生講話を一席ぶちたい。それは妄想といふ心的現象です。精神医学の専門家ではない僕だから、妄想という語もごく常識的に考えている。いま手もとにある国語辞典をひいてみると、「ないことを想像して、固く信じる判断・確信」とある。つまり、この場合正しい登山路と誤った、五分乃至十五分ぐらいの

間の心的現象である。幸にそのくらいの時間の経過で誤判断に気づき、原生林を突破するのを、その中で一夜の露営を経験しようかといふ目的に変えたので、その後の心的状態は「おかしいなあ?!」という自意識はあるが、すでに妄想から解放されているといつてよいだろう。

“秘境”陥落に直面

吉ヶ原湿原

▼長野県上高井郡高山村、群馬県との境にある御飯山の山中、標高千七百mの所に「吉ヶ原湿原」というのがある。▼御飯山（二一六〇m）カルデラの中にできた台地で、リンドウ、スズラン、ヤナギラン、ヒカゲノカズラなど四十種の高山植物、ハコネサンショウウオ、トワダカワゲラなどの水生動物が見られる。▼昔から山仕事の人の憩いの場になっていたというが、数年前からは学術的にも貴重な存在として一部の人々に知られるようになった。▼ところが、このほど湿原のそばを林道湯沢線が開通、万座温泉への観光道路としても使われはじめた。すでに湿原が踏み荒らされる心配が生じており、地元では自然愛好家を中心に“秘境”を守る運動が起りつつある。（信濃毎日より）

嘉門次小屋の秋

葛紅葉燃ゆる針葉原始林

柿原謙一

赴衆行となるはこのまざるも、上高地の紅葉と嘉門次小屋の月明を想ひて、十月十日（休育の日）、河童橋の畔に到る。千客万来して薄曇りなるも山容さだかなり。奥又白の谷にテント泊り予定の三岳友と岳沢を眺めつつ、梓川左岸にて昼餉。それより明神三叉路までともに歩き、ひとり別れて嘉門次小屋へ。そこに登山袋を解く。

翌朝大快晴。明神岳はそそりたち、池の面に霧流れゆく。黄葉の徳沢を溯行し、大滝山にたてば這松のにおいにわかにつよし。蝶ヶ岳にむかへば、草紅葉の道ゆく人まことにまれにて、わが一人の道なるがごとし。穂高と槍は新雪をよそおいて秋高く、常念いまだ雪をかむらず。長堀山の三角点をふみ、暮色せまる徳沢牧場あとに降り、嘉門次小屋に第二夜を迎ふ。この夜いささか混雑す。

前号、柿原さんの「上武国境の三つの峰」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

訂正

(誤) (正)

七頁二段八行目	度右岸	度左岸
" " "	左岸に	右岸に
" " 十四行目	左岸	右岸

紅葉の道に人湧く上高地
少憩のち梓川右岸の道を新村橋へとたどる。この道まさに静閑。原始林には葛紅葉赤く、対岸には大滝山・長堀山にもりあがる黄葉の山肌の美。往還の途次わずか数人の若き岳人に遭ひしのみ。夜半満点の星と下弦の月に対する。

明日（日曜日）の天氣と混雑からは逃ぐるにしかずと、本日ともに下山と決す。

翌朝は曇天にて朝寒をおぼえず。奥又白より三岳友くだりきたりて炉端に憩う。

このたびの紅葉、星と月、大快晴の槍・穂の威容など想いつつ、炉辺にてバイブ新管に点火し、このバイブの愛称は「梓川」となすべしと思う。

会務報告の幹事改選の個所で、新山行幹事岡田健志さんとなつているのは池知昭洋さんの誤まりでした。

附記 釜トンネルの前後、山田亮三氏推奨の井上靖「櫻の木」を想ひて苦笑。

—一九七四・一〇・一七

ロツキーでの休日

石 弘光

あくる日眠い日をこすりながら、七時頃ベ

ットを離れる。とても良い天気である。加地宅からみるロツキーの山々の景色もまたすばらしい。今日は、昨夜相談したようにネス・キャニヨンよりもっと奥に入ったところにある一一、二二六フィートもあるプファイフアーホーンという山に登ることになつていて。かなりの長旅になるので朝早く出立する必要がある。大急ぎで朝食をとり、奥さんが作つておいてくれたサンドイッチ等をザックに入れて加地宅を後にする。

途中近くのスキー場にいくという女の子を二人ひろつてやる。例のヒッチハイクといふやつである。ヒッチハイクをしたり、されたりという仁義はアメリカではえらく発達している。今日は二〇分でひろつてもらつたと、彼女達は喜んでいた。ソート・レーカ・シテ

イの周辺には、有名なスキー場がいくつもあるらしい。加地さんはあくまで山屋で通してゐるらしく、したがつて普通のスキーはもつていないとのこと、山スキー対ゲレンデスキーの比率は、圧倒的に後者が高く、山は一部の人の独占になつているようである。

高くて上々のコンディションであつた。スキー場へいく分岐点で彼女達を降し、更にロツキーの山につくられたハイウェーをする。家からでて一時間ほど車を走らせて、どうやらプファイフアーホーンの取付点に到着した。取付点は川の向うにあり、スノーブーリッヂをわたつて、やにわに急斜面の登りである。日本とちがつて指導標など一つもない。それだけ一般化していないし、一般の人は来ておいたりから本格的な展望が開けてきた。

やはりロツキーの山なみはすばらしい。名前がわからぬのが残念である。加地さんが一々教えてくれるが、英語の山の名前は人の名前同様に覚えるのがむずかしく、今となつてはすっかり忘れてしまつた。一一、三二六フィートといえど、約三七〇〇メートル。やはり相当に高い。主稜線につきあげる尾根の末端についたときは、三時をこえていた。

アメリカのワッパは、なかなか快適であつた。加地さんのスキーと同じペースでいけるので、加地さんも一安心したらしく、今日は〇〇〇フィートをこえる山群は見事であった。

どうしてもプファイフアーホーンの上までい

くとはりきつてゐる。なんでも前回試みたと

きは、肩のあたりで吹雪になりかつ雪崩にまきこまれ仲間が数人うまつてしまい断念せざるをえなかつたとのことである。天気はあくまで良く、二月の山にしては気温もけつこう

一トの山がならんでいる。主峰に達するには二つのルートがあつた。ひとつは主稜線につき上げる尾根をとつてから、稜線づたいに主峰までいくもの、もう一つはカールの底までいって一気に主峰頂下まで急斜面を直登するものであつた。前者は主稜線にでるまでは容易であるが、それからの稜線が岩と雪の岩稜である。ところどころナイフリッヂになつてゐる。ザイル、ピッケル、アイゼンの用意のないわれわれにとっては、一寸手ごわそうである。気温もだいぶ下つてきたので、雪崩の心配もないと判断カールを直登するルートをとることにした。

「たつた二人の山」とは、こんな状態をいうのである。今日一日中、誰にも会つていな。いまや広々としたカールの斜面をもくもくと登るのは、われわれ二人だけである。東斜面のこのカールには、急速に日が落ち夕やみがせまろうとしていた。帰途の滑降を考え、できるだけ高くまでスキーを使うといふ加地さんは、カールの中をかなり大きくジグザグにルートをとつて登つていく。小生は、背にあつたが、それでもピッケルはありスリ

大斜面の中途でワッパをぬぎ、帰途に備えて本もつて文字通り直登することにした。

遠くからみたときさほどに感じなかつたこの斜面は、実際にとりつくと大変であった。傾斜も急である。最初、一回けりこんでできたステップも次第に二～三回必要になつてきた。斜面が目の前にせり上つてきて、ついに両手でバランスをとるようになつってきた。首を痛いほどねじまげると、夕やみせまる紺碧の空に頂上があつた。陽はいただきの背後になり、われわれの周辺にもう太陽の光の恵みはなかつた。それでも五歩、一〇歩と休み休み高度を上げることに専念した。遠くからみたとき、斜面の五分の四ほど上部にある最初の岩の露出した所に、どうやら到着した。下をみるとぞつとするほどの急勾配で斜面が続いている。ふと一年生のはじめての夏山で、

そんなことを考えつつ、休止した岩から更に一〇～二〇メートルの距離をかせいでみた。事態は、絶望的になつてきた。太陽がこの斜面をささなくなつてから急激に気温が低下してきた。何回けり込んで、つま先がやつとかかたるでいどのステップしかできない。もはや明るかにピッケルとアイゼンの世界である。このときほど手にもつストックの無力さ、たよりなさを感じたことはない。頂上はすぐそこにあった。しかし岩肌がかなり露出しており、そこには雪と氷がびっしりと付着しているようであった。いつのときも、夕やみせまるころ最後のきらめは早い。アメリカの山で滑落、大けが、

アップしても何んとかなりそうな気はしていた。今はスキーのストック一本、しかも滑りやすいスキー靴である。しかし幸いなこと、下を本もつて文字通り直登することにした。

今はスキーのストック一本、しかも滑りやすいスキー靴である。しかし幸いなこと、下を本もつて文字通り直登することにした。

今はスキーのストック一本、しかも滑りやすいスキー靴である。しかし幸いなこと、下を本もつて文字通り直登することにした。

入院などまっぴらである、と考えただけですぐに退却の決意がついた。

スキーをデポしたあと、小生のあとを登っている加地さんにこの旨を大声でつげる。加地さんのルートは、小生のより一寸左よりもう少し、頑張ってみたいとのこと、加地さんにとっては前回のリターン・マッチのこともあってなかなか断念できないらしい。小生のみ、先に降ることにした。凍りついた急斜面の下降は、前にもまして困難をきわめた。

スリップの心配がない所まで降りたときは、本当に心からほっとしたものである。上をみると加地さんもあきらめたらしい。下りる態勢になっていた。

カールの中腹からの大雪面の滑降は、すばらしかった。一〇時間近くかけて登った今迄の努力は、まさにこの瞬間にむくわれたようであった。斜面が広いだけに斜滑降、キックターン、試みるうちにボーゲンていどはこなせるようになり、ノルディックのスキーも気にならなくなってきた。ただ背にくくりつけ

た重い大きいアメリカのワッパが気になつただけである。

樹林帯の深雪に入ると、やはりスキーを楽しむムードとは殆ど遠くなってきた。木の下の雪の少い穴におちこんだあと、衝突で上かられたまっていた雪にうめられまさにダブルパンチという光景も一、二度あつた。加えて朝からの行動のバテが急速に体中に拡がり、腰が抜ける寸前の状況であつた。加地さんの鮮やかな滑降をみながら、必死になつてあとをおいかけていく。雪面はバリバリになつてき面の下降は、前にもまして困難をきわめた。

スリップの心配がない所まで降りたときは、本当に心からほととしたものである。上をみると加地さんもあきらめたらしい。下りる態勢になっていた。

一日、人目のつく道端にとめておいたことを

て顔面制動の折は涙がでるほど痛かった。

車のデポにどうやら戻ったときは、もうすっかり闇が訪れる頃であった。その日は月曜日であった。ユタ大学の駐車票の入った車を

三日目はロッキーに別れを告げる日であつた。午前中、奥さんの出席しているユタ大学の日本史のコースで「占領下の日本経済の復興」というテーマで、講義をする約束になつていた。加地さんも今日は、一日中ゼミと講義とのこと。昨夜から風邪で熱を出しているミヨちゃんのことを心配しつつ別れをつげる。こんな関係もあつてオドガナイザーの奥さんは講義に出席できないとのこと、しきりに残念がつっていた。

講義のあと質問にきたアメリカ人の学生と親しくなり、空港まで送ってくれるという。途中彼のアパートへ連れて行ってもらう。なんと奥さんは日本人であり、えらくなつかしさがつてくれた。

加地さんはしきりに気にしていた。アメリカのプロフェッサーの方が、どうやら勤勉であります。斜面が広いだけに斜滑降、キックターンするようだ。疲労困ぱいのていであつたが、久々が一望の下に見わたせた。今となつては、しぶりの一日の肉体行動で心地よい疲れが全身をおそつてきた。家では奥さんとミヨちゃんが首を長くして待つてくれた。

帰途、ソート・レーク・シティの空港をとびたつた飛行機の窓から、再びロッキーの山々が一望の下に見わたせた。今となつては、處にあるかわからない。しかし連なる山々の中の一つに、くつきりと足跡の残された頂

上が目に入った。このとき、昨日撃退されたくやしさがこみあげてきた。

「エース」時代の想い出

中 島 寛

ミール・サミール遠征（一九六五年）からサラクラール遠征（一九六七年）までの前後何年間かの間、山岳部OBの若手が東京駅八重洲口近くのビルの地下にある「エース」というバーを根城に、定期的に集まっていた事がある。酒を飲みながら長時間にわたる議論をし、ある時はホラを吹き、ある時はグチをいいあつた。それでも自ら設定した目標に向かって邁進し、お互に切磋琢磨していた時代の記憶は今でも鮮明である。

そこには間違いなくわれわれの青春があつた。今、それを憶い出していること 자체があつらくなつた。充実した一つの経験であ

げなく「エース」に立ち寄った。レイアウトから何から昔のままだが、今や名前も「やえす」と変わっていた。親しくしていたマスターも変わってしまい、階段のところに飾つてあつたなつかしいアンデスの写真は、跡形もなくなくなっていた。

しかし、あのノートさえあればそんなこと

はどうでもよかつた。以前と同じ飾り棚の片隈に、ほこりをかぶつておいてある何でもないす茶色の表紙のノートを見つけたときはほんとうにびっくりした。この三、四年の間多分誰も訪れたことはなかつたろうし、紙屑と一緒に捨てられたつて文句をいえる筋合いは何もないのだから、この侥幸に感謝しなければなるまい。

第一ページの書き出しは、一九六四年六月十二日、今は亡き孫さん（中川孫一氏）の筆で始まっている。

「針葉樹会が四十二年目に組織化された。長い過程ではあつたが、歩一步頂上をきわめ

たとの感が深い」——頂上をきわめたという表現はいかにもオーバーだが、創立者孫さんの感慨としては少しも不思議ではないだろう。むしろそういうことが言えた一時代があつたことを喜こぶべきだというのが今の率直な気持ちである。それだけの愛着と誠実さもつて山岳部を育て、われわれを見守つてきてくれた孫さんの恩情の深さを思うばかりである。

僕はその頃、まだ病院のベッドのなかで、"水平ぐらし"をしていた。大賀や倉知がよく来てくれた。倉知は来るときはきまつてやり場のない憤りや不満を僕にぶつけてはまた"戦場"に戻つていった。その忿懣のなかで、遠征に行きたくて一生懸命一橋大学山岳会なる組織を"でっちあげ"ていたときの出来事が彼にとつて、もつとも大きな比重を占めていた事は、あるいは僕が一番よく知っていたのかもしれない。しかし、その度のさわやかな印象は、僕の暗い病院生活をどれだけ支えてくれたかわからない。それだけに、この孫さんのノートの第一ページに書かれたたつた

二行の文章にこめられた意味は実によくわかる。

この集会第一日の分には、他に吉沢、中村（保）、横山、中村（正）、各務、宮川、大、さんを隊長とするサラグラール遠征、山本（健）、渡辺、安田、奥野、高崎、大賀、山本（尚）、倉知、そして日本山岳会々員の藤島敏男各氏が感想を書いている。そして中村保氏の「この集りが一橋 Mountainer の新しいメツカとなることを大いに期待して……」といふ言葉がそのときの雰囲気をよくあらわしている。

それから延々と続いた「エース」の集会は甘利さんを隊長として丸子、佐藤（之）の三名がでかけたミール・サミール遠征、山本（健）で、昭和四十五年十月一日、クローケの集会の記録で終っている。もっとも一九六六年六月以降は、たまにポツリポツリと誰かがこのノートを開いていたにすぎない。

あれだけ頻繁に通っていた「エース」から足が遠のいた直接の原因是、最初の頃、勝手にニッカの角ビンをとつて、適当に飲み（そろいえばボトルを置く会員制バーのはしりだあつたか。当事者さえもう憶えてはいまい。）といった）スペゲッティーを食べてせいぜい一人四、五百円で済んだのが、一九六五年十月かから席料を一人五〇〇円とられるようになつたからである。そういえば、あの頃スペゲッテのメモが載つていて、熱氣を帯びたその場の議論が目に浮かんでくるようだ。時代は進歩する、といわれるが、山登りの技術そのものはさておくとしても、山登りに対する考え方の面でわれわれはどれだけ進歩しているか、そういうことを反省する材料としてもこのノートは格好のテキストである。

あの時代はもう一度呼び戻すことはできな

い。しかし、あの「エース」でのはりつめた、愉快な語らいも永久に戻らないのだろうか。甘利さんを隊長として丸子、佐藤（之）の三名がでかけたミール・サミール遠征、山本（健）ただ若い会員だけが集まつていたわけではなかった。古い会員も新しい会員も山を中心にして氣楽に集まり、飲み、語らつていた。孫さんは一橋山岳会のなかにあるサロン的伝統など五回も登場している。そこに針葉樹会あるいは一橋山岳会のなかにあるサロン的伝統を見ることができるような気がする。最近は、幹事がいくらもがいても、懇親山行ひとつ出来あがらないが、あの頃は、五月の五龍でも九月の北岳バットレスでも、老若男女（？）、遠くは新潟や大阪から沢山集まりすぎて、困ったほどだった。それも、こういう都会におけるサロンの存在とけつして無関係ではなかつたと思う。

イーがたしか一〇〇円だった。しかし、本当のところは、目標を失つて、というよりは、新しい目標をつくり出せずに、若手の会員が悲しいことも何回かあつた。一九六四年には篠原さんが亡くなつていている。「弔辞を読んだ。だらしないと思うが読みながらおれは涙が出てきて途中で立往生してしまつた。可さんやおミネもきたが、幸い、あとからで、おれがペソをかいたのを余り見られなかつた」（一

九六四・十・二・山本）。その可さんももう
いない。（一九六七・七・四病没）。倉知が
アルプスに行つたとき同行した君島氏を失つ
たのもこの間のことだつた（一九六五年）。
しかし、何といつても素晴らしいのは、苦
難の末にミール・サミール隊を送り出し、そ
の成功を足がかりにして、ヒンズー・クシュ
遠征が実現したことだつた。もっともこの頃
の目標はカラコルムのマルビティン峰だつた
が、一九六六年の八月二十日の頃には、僕の
書いた次のようないきがいのある「来年のカラ
コルム遠征が正式に決定した。去る十八日の
評議員会で、孫さんが『ここまできてひき下
がることはできない。ともかく前進あるのみ』
と語つたとき、僕は何か胸のつまるような気
持だつた。こんな文章もけつして誇張では
なかつた。事務局長的な立場にいた僕は、あ
の遠征の前後、よく孫さんをお訪ねした。す
い分無理なこともお願いしたが、いやみのよ
うなことをいわれたことが全くなかった。こ
れが計画を進める上でどれだけ励ましになつ
たかわからない。孫さんにとつて自分のかな

えられなかつた夢を実現できる事が限りない喜びであつたかもしけない。しかし、評議員会で議論が紛叫し、慎重に検討すべしといふ結論を出しながら、僕に対して『絶対にやり抜かなければいけないよ』とハッパをかけていたのは、他ならぬ孫さんであつた。隊長に山田亮三さんをかつぎ出すつもりで虎ノ門の事務所をお訪ねし、断わられて、そのかわりエビフライをご馳走になつたなんてことを、今でも不思議にはつきりと憶えている。その夜、丸山さんは酒をがぶ飲みして、相當に乱れた字で「山田先輩、後押しはいくらでもやるから隊長を引き受けて下さい」と書いている。

僕は胸を患つて、一九六三年六月から一九六四年九月までの一年半の入院生活を送つたのだが、その後、倉知、中川（滋）が『一周年記念大宴会（？）』なる酒盛りパーティを開いてくれたのも、この「エース」だった。そのときの記事にもカラコルムの名前が登場している。この頃、会報（復刊第八号）に倉知が書いた「アンデスからヒマラヤへ」とい

う文章は、その後、「ロシュ・ゴル氷河の山旅」のなかにも一部再録されているが、その頃の、熱病みたいなヒマラヤ計画の起爆剤の役割を果した「歴史的な」意味を持っていた。すべてが山をめぐって回転していた。少なくとも行動を基礎にした感慨がこのノートの基調であった。今は「女の子にふられてやることがないので飲みにきた。いい年してだらしないと思うよ」なんていう話が仲間のなかの話題になることさえなくなってしまったよう気がする。

チビリチビリ、ウイスキーをなめながら、このノートを読んでいて、僕が思った事は、同窓会もいいけれど、昔話をするには若すぎる、あるいは、酒の肴にするに足る昔話もない人間が多すぎるようになっちゃ、面白くも何ともないということである。

十年ひと昔といふけれど、これも十年前の話になってしまった。いまと較べれば、それだけ他にやる事が少なかつたという事かもしれない。しかし、それだけなのだろうか。

本多勝一氏が「山は死んだ」という文章を

発表したのもたしかあの頃だった（一九六三年）それが実に大きな影響力をもつていてはと、図らずもかなり若い（一人は一橋大学の学生である）山屋から知らされた。

ヒマラヤの話をしていたときだつた。彼は、いくら一生懸命山へ登つても、どうしても夢中になりきれない、シラケてしまうという。

だからヒマラヤへ行きたいという。そこで、ヒントのつもりで幾つかの登山計画のアイデ

イアを話したら、彼は、こんどは「バイオニア登山の時代は終わつたのではないですか」

といふ。とたんにこちらはシラケて、複雑な気持ちになつてしまつた。こういつた理屈が、他人志向型の若い人間の貧困な想像力のかくられ義に使われることによつて、"山は死ぬ"ことを痛感せざるをえなかつた。

あの「エース」時代のように、もっと素朴に、コツコツと山に登つてみたいと思う。そこからもう一度ヒマラヤが見えてくるはずであることを確信した。（一九七四・十一・九）

追記 このノートは、倉知君の手を経て、

三森君が保管しています。

会務報告

昭. 49. 7
昭. 49. 11

西牟田伸一

△懇親山行報告▽

○クラシック岩登りの会

九月十三日～十七日

行程

十三日 夜行にて出発（倉治敬、池知昭

洋、学生松田）。

十四日 岳沢テント場まで入山。

涸沢より学生の前神、藤本合流。

十五日 終日雨。倉知下山。

十六日 全員でコブ尾根—ジャンダルム

飛驒尾根—天狗沢—テント場。

十七日 下山。

○もみじ狩り 七月十九日～二十日

行程

十九日 土合ハウスに夕刻集合。

（山田亮三、中島寛、原博貞、

中村幸正、池知昭洋、他二人）
二十日 霧雨。マチガ沢出合まで散歩。
九時頃山田、中島下山。

原、池知は引き続き幽の沢出合まで散歩。

△月見の宴▽十一月三日
恒例の如く文化の日の夜、国立の部室にて開催。焚火を囲んで楽しい夜を過した。

出席者

吉沢一郎、甘利仁郎、松下順吉、高崎

治郎、松尾寛治、小林茂雄、竹中彰、

西牟田伸一、井草長雄

今年度は十二月に忘年山行を計画しておりましたが、前二回の懇親山行での参加人数から考えて、それほどの参加が期待出来ないとして急拝新年会を如水会館で行なうことに致しました。

日時 昭和五十年一月二十二日(水)

午後六時三十分

場所 如水会館 南北日本間

会費 四千円

※都内会員の方には返信葉書を同封しましたので出席の可否をお知らせ下さい。

また地方会員の方で出席可能な方は、

左記、総務幹事西牟田伸一まで御連絡ください。

杉並区高円寺南一の二十八の十九

(電) 三一五一一七九一

△翁樹会報告▽

昭和四十九年十一月二十八日(木) 日本橋
「弁慶」において開催。

出席者(敬称略)

吉沢一郎、村尾金二、松木謙三、近藤恒雄
金田一郎、河相薰、手塚晴雄、増山清太郎

鈴木英雄、中島孚、黒田正治、小林重吉、

望月達夫、榎本直治、岩崎利一、宮城恭一

山田亮三、久保孝一郎、根本大、佐野茂雄

高野秀男、原田豊、松下順吉、小林茂雄、

樋口洪、山崎拡、大島理則、伊藤慈生。

当日、欠席会員消息。

冠木伊右衛門……十月二十日、カトマンズよ

り自宅へ来信あり、十一月末頃、帰国の予

定の由。(御長男よりの返信)

佐藤政雄……右肩胛骨鎖骨剥離、関節脱臼で

手術、入院の由。九月、岩手山、十月、赤

◇

以上二十八名 城山へ。

年末を控えての折だけに、出席予定数をひ

かえ目にみていたところ、まれにみる多数の

ご参加をいただきました。会場の手狭のため

膝すり合せる程の窮屈をご辛抱ねがつたよう

な次第でしたが、飲むほどに、最近の山行談

やら、写真の交換やら、来年の山行の打合せ

等々。時折、浮き世の不況談が混入してくる

ものの、やはり山の話をしている時の皆さん

は元気一杯です。その中に「山讚賦」の合唱
が出てくるなど、にぎやかな一夕であります

た。次回は榎本さん提供の8ミリも見る予定。

なお、これまで幹事のひとりでした松下順
吉君が仕事の関係で関西へ移ることになりま
した。

榮三。

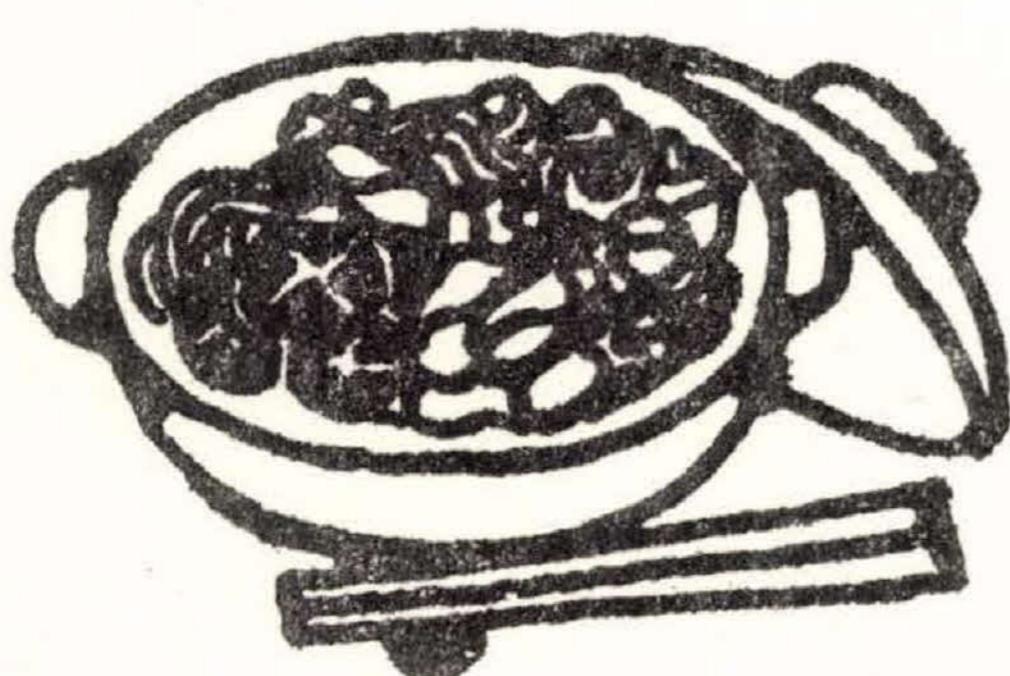
(幹事 山田、小林)

下記の方々、当日、都合わるく、欠席のや
むなきも、夫々、ご元気の旨、返信いただき
ました。

宇佐美敏夫、久保田礼治、丸茂平造、清水

達夫、森健二、堀岡清、豊田忠巍、柿原謙

一、松浦静雄、佐々木誠、深谷光茂、中村



△山岳部より▽

- 冬山合宿計画
- 一二日 新穂高温泉 → 弓折南尾根 → 鏡平
一三日 ↓ 弓折岳
- 一四日 スペア
- 一五日 } 笠ヶ岳往復
- 一六日 } (テント一張を秩父平へ出す)
- 一七日 スペア
- 一八日 縦走隊 → 硫黄乗越
- 一九日 笠ヶ岳隊 → 新穂高温泉、下山
二〇日 縦走隊 → 槍ヶ岳の肩、槍往復
- 二一日 縦走隊 → 南岳
- 二二日 スペア
- 二三日 笠ヶ岳隊の最終下山日
- 二四日 北穂高往復
- 二五日 } スペア
- 二六日 → 横尾尾根 → 横尾

二七日 → 木村小屋 → 泽渡、下山
二八日 スペア、最終下山日

縦走隊 前神直樹 (L)、藤本敏行、古橋稔

加藤博行、佐藤活朗、松田重明

笠ヶ岳隊 若林貴之 (L)、浅田充、近藤泰

坂牧利実

※ 両隊は弓折岳より笠ヶ岳往復まで同一行動をとる。

復刊四十一号をお届けします。通巻で百四十号になるようです。

◇

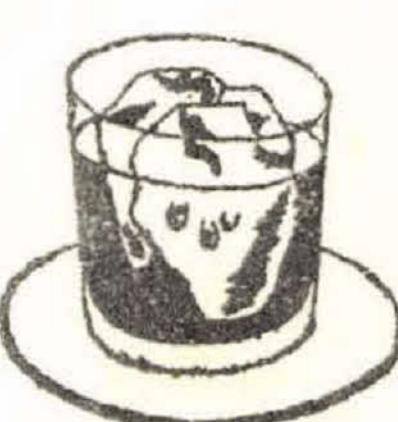
今回は昭和二十年代の方々を中心原稿を依頼したのですが、全くの空振りにおわってしました。次号は三月に出す予定です。例年の通り、一九七四年度の山行表を掲載したいと思いますのでふるって御寄稿くださいようお願いします。山を見限つて方、山に見限られている方も近況報告などお寄せください。

◇

格調の高さを狙いつつも、話のタネになるような面白い会報でもあるようにしたいと思います。原稿を書くのが面倒くさければ編集係で談話をまとめます。

(井草長雄)

編集後記



針葉樹会報 復刊 第41号

発行日 1974年12月

発行人 針葉樹会 代表 望月達夫

編集人 井草長雄

〒186 国立市北1-1-1 関方

印刷所 内外リッチ